

「恋愛を学問として考えること」

大阪教育大学 齋藤直子

「恋愛が学問になる」と聞いたとき、読者のみなさんが思い浮かべるのはどんな研究でしょうか。動物に関する研究をもとに、人間の恋愛について考察する行動科学的な研究を思い浮かべる人もおられるかもしれません。マスコミが若者の恋愛をどう描いてきたかといった研究を想像する方もいるかもしれません。こういった定番ともいえる研究は、基本的には「男女」の恋愛を前提にしてきました。しかしこの20数年の間に、恋愛研究が対象とするものはずいぶん多様になりました。研究の範囲が広がった理由は、わたしたちの愛や性、結婚をめぐる常識がアップデートされ、多様な愛や性のあり方を「例外」ではなく、人権の問題として捉えるようになったからでしょう。

アニメのキャラクターに本気で恋をすることや、マッチング・アプリを使って恋人と出会うこと、そもそも恋愛をすること自体に興味関心がない人もいるということなど、ある人にとっては当たり前のことであるけれども、ある人にとっては信じ難いという現象があります。このような恋愛のあり方が受け入れ難いと感じる人々にとっては、人はだれでも年頃になれば、恋愛に興味を持ち、生身の人間（しかも男女）同士が身近なところで出会って恋愛に発展し、いずれ結婚するのが「常識」だと認識しているからだろうと思います。

しかし、少し長いスパンで歴史をみると、人々の「常識」自体、時代によって変わります。例えば、恋愛という概念自体、欧米から輸入されたものです。大正時代、外国語が読めたり、本を読む習慣のあるような階層の人々は、物語で読んだ恋愛というものに強く憧れていましたが、本人たちはお見合いで結婚していました。庶民層では、1920年代から1960年代まで、見合い婚が主流でした。つまり、恋愛そのものが「常識」ではなかったのです。その後は、社内結婚や兄弟の紹介といった半分お見合いのような恋愛婚が多くを占めていました。結婚前に性的な関係を持つことへの意識がかわるのは90年代後半のことです。2000年代には、恋愛に関心のない「草食系男子」が話題になりました。2001年にはオランダで初めて同性婚が認められ、その後、世界中に広がっていきます。

昨秋、『恋愛社会学』という本が出版されました（私も1章書かせていただいています）。芸能人に本気で恋をする「ガチ恋」、二次元キャラクターなどに性的に惹かれたり恋愛感情を抱く「フィクトセクシュアル／フィクトロマンティック」、他者に恋愛感情を持たなかったり性的に惹かれない「アロマンティック／アセクシュアル」など、これまで例外的・周辺的とみなされてきた性のあり方が、いまでは多様な性のあり方のひとつとし

て位置付けられつつあります。100 年という長さで恋愛・結婚をみてみることで、新しい
気づきがあるかもしれません。